

令和 3 年 5 月 25 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02807

研究課題名(和文) 単文構造と複文構造の連続性に関する日英語対照研究：認知類型論の観点から

研究課題名(英文) Contrastive Study on Continuity of Simple and Complex Sentence Structures in Japanese and English

研究代表者

守屋 哲治 (Moriya, Tetsuharu)

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号：40220090

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本語の名詞修飾節構造が中国語や韓国語などと共通性を有するにもかかわらず、主節と名詞修飾節との間の垣根がより低い日本語において語用論的推論を用いて解釈を行う名詞修飾節の生産性が高いことを示し、それと連動して、第2言語としての英語の学習者においても日本語母語話者が中国語や韓国語母語話者などよりもより広い範囲の名詞修飾節に関する誤用があることを明らかにした。以上のことから、認知類型論的な個別言語の差異が、第2言語習得における干渉に影響を及ぼしていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

言語の認知的側面に注目した研究は近年盛んに行われているが、言語習得を視野に入れた理論的・実証的研究はそれほど多いとは言えない。本研究では、認知類型論的観点から日本語の名詞修飾節の特徴を明らかにするだけでなく、その特徴が実際に英語を習得する際にどのように影響するかについて実証的に明らかにした。

このような研究の方向性は、認知類型論で取り扱っている他の現象にもあてはめることができ、言語の認知的側面の研究と言語習得の研究の架橋的役割を果たすと考えられる。

研究成果の概要(英文)：In this study, we showed that although the structure of noun modifier clauses in Japanese is similar to those in Chinese, Korean, and other languages in Asia, the productivity of noun modifier clauses, which are interpreted using pragmatic reasoning, is high in Japanese where the barrier between the main clause and noun modifier clause is lower. From the above, it was clarified that the difference of individual languages with respect to cognitive typology affects the degree of interference in the second language acquisition.

研究分野：日英対照言語学

キーワード：名詞修飾節 言語類型論 対照言語学 第2言語習得 日本語 英語 中国語 韓国語

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

言語類型論では、複文構造の現象に関して、どのような普遍的傾向や変異が存在するかを探求してきた (Haiman and Thompson et al.1998, Horie 2001, Haspelmath et al. 2005, Shopen et al. 2007)。また、Croft (2001) の根源的構文文法(Radical Construction Grammar) の複文の連続性に関する分析は、認知類型論的な視点を取り入れた研究として注目されている。日本語とその他の言語との複文構造に関する対照的研究では、日本語の連体修飾節と他言語の関係詞節の特徴の対照研究が行われている(Comrie and Horie 1995, Comrie 1998, Pardeshi, Wang, Horie 2008)。特に、日本語には関係節と同格節の区別はなく、いずれの場合も、修飾節が被修飾名詞に前置され、その名詞の内容を説明するという一般的名詞修飾節(general noun modifying clause)であり、その特徴は中国語や韓国語にも見られるという (Matsumoto(1988,1997), 松本(2014))。これらの研究動向が、日本語や英語の第一・第二言語習得研究に影響を与えている例 (大関 2008) も見受けられる。

第二言語習得における複文構造の研究は、言語類型論的観察に基づいた関係詞節の習得順序の研究(O'Grady et al. 2003, Matthews and Yip 2003, Ozeki and Shirai 2007)や、Wh-移動や繰り上げなどの規則の習得研究 (Bley-Vroman et al. 1988, Johnson and Newport 1991) などが見られる。これらの研究は、いずれも特定の言語理論から生じた予測を検証しようとするものであり、複文構造自体がどのように習得されていくのかという視点は必ずしも明確ではない。

研究代表者と研究分担者は、平成 25 年度から 27 年度の科研費の研究において、関係詞節と同格節というカテゴリーを前提として日本語母語話者の英語複文構造習得の研究を行ってきた。その中で、名詞修飾節と被修飾名詞の関係に関する制約が緩い日本語を母語とする英語学習者は、名詞修飾節と被修飾名詞の関係が限定的である英語を学習する際に、同じような性質を持つ、中国語や韓国語などの母語話者よりも、より干渉による誤用が起こりやすいことを明らかにした。

また、守屋(2015)では、否定辞繰り上げ現象を、従属節の主節化として捉えることで、否定辞繰上を許す述語の規定に理論的基盤を与えることができる可能性を示し堀江(2014)では、従属節の主節化および主節の従属節化を認知類型論の立場から通言語的に分析をしている。

以上を踏まえて本研究では、前回の科研の研究を深化させ、認知類型論的な観点から日本語の名詞修飾節の特徴を中国語や韓国語などとの相対的な関係から捉え特徴づけ、さらにそのような認知類型論的な差異が言語習得の際にどのように影響するかを実証的に明らかにしようという発想に至った。

2. 研究の目的

本研究は、中国語や韓国語における名詞修飾節の構造と、日本語における名詞修飾節の構造を、認知類型論的観点から対照することにより、名詞修飾構造の一般性および個別言語による変異の特徴を明らかにすることを目的とする。単文と複文は二項対立的な違いではなく、連続性があるという立場から、複文構造の間の連続性を、主として、形態的な符号化と語用論的推論の許容性という現象を中心として分析し、中国語や韓国語と日本語の間にある共通性を明らかにするとともに、個別言語的差異の要因も抽出する。また、このような共通性・個別性の要因が、日本語母語話者の英語習得にどのような影響を及ぼすのかを明らかにする。

3. 研究の方法

研究を遂行するにあたり、研究代表者および研究分担者は研究全体の統括を行うと同時に、日本語母語話者・中国語母語話者・韓国語母語話者の英語学習者データの収集をおこなう。資料としては、主として英語学習者のライティングデータおよび、英語学習者コーパスのデータを用いる。一方研究分担者は、日本語の名詞修飾節の認知類型論的な位置づけに関する理論的対照研究を行う。なお、作文データに関しては、神戸大学の石川慎一郎教授が中心となって開発した英語学習者コーパスである、The International Corpus Network of Asian Learners of English(ICNALE)を利用する。

4. 研究成果

研究分担者は、日本語研究および通言語的研究における名詞修飾節に関する過去から現在までの研究史を整理したうえで、日本語・中国語・韓国語がアジアの言語として、英語よりはより「外の関係」の名詞修飾節構造を許容するという共通性を有するにもかかわらず、主節と名詞修飾節との間の垣根がより低い日本語において、語用論的推論を用いて解釈を行う名詞修飾節の生産性が高いことを示した。これは日本語がより文脈依存的な傾向にあることを反映したものと考えられる。

このような名詞修飾節の特徴の違いが、第2言語習得においてどのような影響を与えるかを調べるために、日本語、中国語、韓国語母語話者の英語名詞修飾節に関わる使用例、誤用例の収集を行い、タイプ別の頻度、誤用の割合などの調査を行った。特に同格節にも関係詞節にも用いられる *that* に注目し、各国の大学生の英語作文を調査したところ、中国語、韓国語母語話者の英語学習者より、日本語母語話者は多くの同格節を使用する傾向があり、日本語における名詞修飾節の制限がより少ないことを反映して、より誤用の割合が高いことが示された。

以上のことから、語用論的な推論を中国語や韓国語よりも多用して許容される名詞修飾節の範囲が広い日本語を母語とする英語学習者は、形態的な柔軟性から英語よりは「外の関係」の名詞修飾節の許容範囲が広い中国語や韓国語を母語とする英語学習者よりも、英語名詞修飾節構造の誤用が多く、認知類型論的な差異が英語名詞修飾節構造の修得に差を与えていることが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 堀江薫	4. 巻 1
2. 論文標題 文構造の中核と周辺における準体構造と連用構造の機能分担と競合	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 KLS Selected Papers	6. 最初と最後の頁 226-236
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本卓、守屋哲治、久保拓也	4. 巻 10号
2. 論文標題 英語教育における言語学と文学と文化：カリキュラムと教科書の観点から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 金沢大学人間社会研究域学校教育系紀要	6. 最初と最後の頁 149-164
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 守屋哲治
2. 発表標題 Typological difference and its effect on language transfer: differential use of noun modifying clauses among L2 English learners in Asia
3. 学会等名 Topics in applied linguistics: Classroom-oriented research (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堀江薫
2. 発表標題 文構造の核と周辺－従属節のタイポロジー
3. 学会等名 第43回関西言語学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 堀江薫
2. 発表標題 『内の関係』と『外の関係』のマーキングに関する言語間のバリエーション：クメール語と日本語の対比を中心に
3. 学会等名 NINJALシンポジウム「日本語の名詞周辺の文法現象」（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 堀江薫
2. 発表標題 日本語の名詞修飾表現と言語類型論
3. 学会等名 NINJAL Prosody and Grammar Festa 2（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kaoru Horie
2. 発表標題 Functional Utility of Noun Modification and Nominalization relative to Renyoo Syuushoku(Adverbial Modification): A comparative study
3. 学会等名 Workshop on Nominalization and Noun Modification（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 edited by Yoko Hasegawa	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Cambridge University Press	5. 総ページ数 760
3. 書名 The Cambridge Handbook of Japanese Linguistics	

1. 著者名 edited by Prashant Pardeshi and Taro Kageyama	4. 発行年 2018年
2. 出版社 De Gruyter Mouton	5. 総ページ数 772
3. 書名 Handbook of Japanese Contrastive Linguistics	

1. 著者名 山梨正明編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 384
3. 書名 認知言語学論考No.14	

1. 著者名 中村芳久教授退職記念論文集刊行会編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 528
3. 書名 ことばのパースペクティブ	

1. 著者名 edited by Yoshiko Matsumoto, Bernard Comrie, Peter Sells	4. 発行年 2017年
2. 出版社 John Benjamins	5. 総ページ数 381
3. 書名 Noun-modifying clause constructions in languages of Eurasia : rethinking theoretical and geographical boundaries	

1. 著者名 edited by Prashant Pardeshi, Taro Kageyama	4. 発行年 2018年
2. 出版社 De Gruyter Mouton	5. 総ページ数 722
3. 書名 Handbook of Japanese Contrastive Linguistics	

1. 著者名 edited by Kyoko Masuda	4. 発行年 2018年
2. 出版社 De Gruyter Mouton	5. 総ページ数 331
3. 書名 Cognitive linguistics and Japanese pedagogy : a usage-based approach to language learning and instruction	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	堀江 薫 (Horie Kaoru) (70181526)	名古屋大学・人文学研究科・教授 (13901)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------